

和歌山大学
経済学部同窓会

http://kourowakayama.com

柑芦わかやま

南出陽一(高商7回・故人)筆

柑芦会和歌山支部

編集発行人 坂本 漸
〒640-8567 和歌山市西汀丁36
和歌山商工会議所2階
山中盛義事務所内
TEL 073-423-1231
FAX 073-433-4066

巻頭座談会

特集「貨幣と食料」について考える

マグレビ・ナビル 経済学部教授(副学長)

岸上 光克 紀伊半島価値共創基幹・食農総合研究
教育センター教授・副センター長

坂本 漸 柑芦会和歌山支部長(経済8期)

塩路 茂一 柑芦会和歌山支部 副支部長(経短6期)

農村が有り続けることの必要性

○一定の食糧自給率の確保

岸上 経済の成熟度は1次より2次、2次より3次と思われて来たが、1次の農村が疲弊すると都市も生き残れない、1次産業が無い国はない、食料自給率をどの程度にするかはそれぞれの国が判断すればよいことだが、農村・農業が衰退すると一番困るのは都市の消費者です。

○生きることは食べることであることへの理解

岸上 少数だが、トマトが土の中で出来ると思っている子も有る。球根を植えるときに、根と、芽の方向をアベコベに植える子がある。

和式トイレが出来ない子もある。生きる力の衰えが危惧される。



○若い人達の田園回帰志向

岸上 2000年以降、30~40歳代の、小さな子を迎えた若い層の農村移住が増えた。

柑芦会和歌山支部「令和3年度・支部総会」開催のお知らせ

開催日時：令和4年5月28日(土) 午後3時30分~午後7時30分

開催場所：ダイワロイネットホテル和歌山 4階 プレジール

①支部総会：午後3時30分~午後4時

②講演会：午後4時15分~午後5時15分

講師：鈴木裕範先生 和歌山大学客員教授・元経済学部教授

演題「紀伊半島の歴史に学ぶ災害。問われるコミュニティ」

③懇親会：午後5時30分~午後7時30分

会費 7,000円

アトラクション：宝子ミニコンサート

kourowakayama@gmail.com

奮っての参加をお待ちします。支部メールアドレス(上記QRコード)までご連絡下さい。



若い人の移住動機には、農業をするために田舎へ移住するのではなく、田舎で暮らしながら、ついでに農業もするという考えがある。

バブルの崩壊以降の日本社会しか知らない今の学生の中には、都会で働くのに比べ、農業は儲からないとか、大変な仕事だとか思わない学生もいる。



おじいちゃんの家の農業を継ぐと言う若い人が増えている。何でも自分でこしらえる、おじいちゃんがカッコ良いと思う若い人が増えている。

サイエティ 5.0 時代の農村農業をイメージする

○情報化社会を超えた先にある社会

マグレビ 経済は常にダイナミックに変化してゆく、メガトレンド（大きな時代の流れ）を把握する必要がある。

テクノロジーの進化による AI 技術、機械学習やビッグデータの活用などによって、デジタル・トランスフォーメーションを進め、人口・社会変化、経済グローバル化、経済力シフト、格差拡大等のメガトレンドを理解することができる。

このようなメガトレンドに基づき政府が描くサイエティ 5.0 時代においては、サイバースペースと物理空間が接続する。

サイエティ 2.0 時代に中心であった農業がどのような形になるかをイメージすると、魅力有る農村・農業像を描くことが出来るのではないかと。

○リスク移転・シフトの手段としての金融

マグレビ 予測できない経済ダイナミクスや新

型コロナ等による不確実性が高まる中で、それらのリスクに対する農業・工業・サービス業の生産者・企業の行動は、経済活動、経済成長の見込み、リスク・リターンの関係を変える。

リスクは他者に移転や転嫁するだけでは無くないことは確実である。例えば、負債による資金提供者は農業活動等に伴うリスクを回避するため、活動結果と関係なく予め決められた収益率を得られることになる。しかし農業等に移転されたリスクはなくなるわけではないので、不良債権の問題が生じる。

このようにリスク移転によって 2007-08 年の米国金融危機が発生した。最終的に、公的資金（国民の税金）を用いて、第三者へとリスク転嫁・シフトが進み、負債問題を解決



するため負債を増加せざるを得ない対策となる。また、お金がお金を生む利子の制度は、トマ・ピケティ「21 世紀の資本」にあるように格差を拡大し、格差社会を生み出す。

農業を含めて、すべての経済活動について、痛みを伴わないと利益は得られないため、資産を共有するのではなく、リスクをシェア（共有）することによって、なくなることはないリスクを分散化することが重要である。

個人または社会のリスク許容度によって投資機会が自由に決められる。経済公平性のため、イスラム金融では利子は認められていない、投資に見合った成果の配分を得るだけだ。出資相手が損失を出しているのに、出資者だけが固定的な利子所得を得ることは認めない。

利子・負債に基づく資本主義は全世界に広がり、それしか無いと思われているかもしれないが、ゼロ金利金融政策における利子のない仕組み、ベンチャ

一企業、パートナーシップによる関係もある。

「新しい資本主義」は単なる富の再分配を目指すだけでは終わらず、金融恐慌や格差の根本問題も解決する必要がある。これからの農業を考えるうえで、これまで政府が提供していない仮想通貨の本質とファイナンスにおけるリスク移転・リスク共有への理解は重要だ。

○食料問題に対する政府の役割・

市場メカニズム

マグレビ 持続可能な社会・人命の保護にとって教育、医療、食料・エネルギー等における政府の役割と市場原理のバランスは重要だ。社会はリスクを共有する正しい仕組みを構築する必要がある。



和歌山大学の取り組み

○時代の大きな流れを読み取るチカラの醸成

マグレビ 経済学研究科改革で設けた複数プログラムの中で、サステイナブルアグリビジネス&フードシステム、エネルギー・アナリティクス&政策、イスラム金融・経済学、都市・地域と交通などが全国の唯一の学際的教育研究プログラムである。

学生には食料問題を含めて、幅広くいろんなことを考えて欲しい。分析力・批判的な思考を身に付け、経済社会のダイナミクスに対応し、多様な主体とともに人類の未来を創る意思決定者・リーダー（協創人材）を育成することが目的である。

○農村・農業・食料についての知識経験を得る

岸上 農業を全学解放授業にしている。

受講前には、農業は要らないとか、重要でないと考えていた学生の認識が変わる。

学生の中でも農学部でない自分たちの研究は農業と関係ないと思っていたのが、農業に役立つという理解するようになる。

○学部を越えた総合力で地域課題に取り組む

岸上 学部を超えて、各学部の、主に若手研究者と共同で、各人の専門分野を持ち寄り、和歌山県下の農村地域の課題研究の取り組みを進めている。

マグレビ先生略歴

出身 チュニジア共和国

1986年 チュニス大学

1991年 和歌山大学 経済学研究科修士課程修了

1994年 大阪大学 経済学研究科 経済学博士
研究分野

人文・社会 / 経営学 / 金融、ファイナンス / 公共
経済、労働経済

岸上先生 略歴

2000年 和歌山大学 経済学部 経済学科 卒業

2005年 大阪府立大学 大学院農学生命科学研究科
博士後期課程 修了 博士（農学）

研究分野

人文・社会 / 食料農業経済 / 環境・農学 / 農業社会
構造

フェイスブックグループ



柑芦和歌山

(こうろわかやま)

地域・大学・同窓 共感のネットワーク

和歌山大学に繋がる方なら、
どなたでも参加できます。

中之島子ども食堂というささやかな取り組みについて

中之島子ども食堂代表

新家 貢（教育学部33期生）

【はじめに】

2012年に東京の大田区の八百屋さんから始まった子ども食堂は、2021年にはとうとう6000を越す数となりました。私が和歌山で初の誰が来てよい「子ども食堂」を始めたのが、2016年の春。そのころは全国でまだ300余りしか子ども食堂はありませんでした。

今回のレポートでは、まず「子ども食堂」とはどんな活動かについて説明をさせていただき、その上で私が主宰する『中之島子ども食堂』の活動について書かせていただきます。

1. 「子ども食堂」とは何か

「子ども食堂」と聞いたときに多くの人が真っ先に思い浮かべるのは子どもの貧困問題とリンクさせ、食事に困る子どもたちに食事を提供するところなのかもしれません。

実際にマスコミが子ども食堂を取り上げるとき、そのほとんどがそういった切り口の記事となっています。

しかしながら「子ども食堂」の付け親である『気まぐれ八百屋だんだん店主』近藤博子さんによれば、「子ども食堂とは、子どもが一人でも安心して来られる無料または低額で食事を提供するところ」が子ども食堂の定義です。ここには、貧困家庭とかの括りはありません。ちょうどその頃に政府が子どもの相対的貧困率のデータを公式発表し、6人に1人が貧困であると認識されるようになり、子ども食堂の活動が子どもたちに食事を提供するというわかりやすい活動だったため貧困対策と紐づけてマスコミに取り上げられ、そうイメージされることとなったのです。

子ども食堂と一口に言っても実際の活動は、活動の目的・活動の頻度（回数）・活動母体・開催場所等

においてまちまちです。

例えば活動の目的では「子どもの貧困対策」「地域のつながりの新たなプラットフォーム」「居場所づくり」であり、その回数は、月に1・2回が最も多く、年に何回かの不定期開催や、逆に週に数回のところもあります。また活動母体も私のように個人でやっているところからNPO法人・企業・福祉関係さらには市町村のところもあります。母体のちがいで開催場所も個人宅からコミュニティセンター、学校や普段普通に営業している食堂とまちまちです。

これは子ども食堂という活動が社会政策として始まったものではなく、社会現象として広がりを見せたからであると考えられます。この自発性と多様性こそが子ども食堂の特色であると思っています。



ところが、子ども食堂が広がるにつれ、本来行政が行わなければならない子どもや貧困家庭に対する施策を補助金や助成金を与えることで子ども食堂にその役割を担わせるようになってきました。

例えば学習支援と称して子ども食堂に来る子どもに対し宿題をみたりすることで金を出し、新型コロナウイルスの感染者が増えてくると、学校が休みになった代替に子ども食堂を運営することで助成

金を出すといい、はたまた子どもの虐待防止に子ども食堂を被せて市町村単位ではありますが、1,000万円という多額な補助金が出されたりもして、残念ながらそれらの金をアテに活動しているところもなきにしもあらずといった状況です。

2. 『中之島子ども食堂』という取り組み

私が代表を務める「中之島子ども食堂」は、その名の通り和歌山市中之島で開催しています。

中之島子ども食堂は、代表を務める私の軽い気持ちから始まりました。当時私は和歌山県青少年育成協会さんの依頼でジュニアリーダーの育成の講師をしたり、子育てや能力開発の講演を県下各地でしていました。

その中で地域のつながりを深め思いやりの心を育むために東北地方で行なわれている「芋煮会」やそれぞれの地域で週に一度「みんなで朝ごはんを」のようなみんなで食事をする活動を提案していました。提案した時には皆さん「いいね」と言ってくれるのですが、なかなか実現に至らず、それならば自分でそういう機会を作ろうということで、SNSで呼びかけたことが子ども食堂を始めるきっかけになりました。もちろん私自身が毎日1人で食事していましたので、私自身が誰よりも子ども食堂(=みんなで食事ができる居場所)を欲していたのであります。

当日地方紙の取材が入ったこともあって、大きな反響があり、食べに行きたい人、自分も調理の手伝いをしたい人から多数連絡がありました。

そうして始めた中之島子ども食堂は、この4月で7年目となります。開催場所を変えながら今は橋詰鍼灸整骨院さんの2階をお借りして第1水曜日と第3土曜日の月2回開催しています。

「みんなで食べると食事は美味しい、楽しい」をキャッチフレーズに子どもから昔子どもだった大人までどなたでも大人300円、子ども無料で参加してもらっています。

私たちが生活する「家庭」・「学校や職場」に次ぐ「第3の場所(サードプレイス)」となるべく子ども食堂という名の「居場所」を目指しています。

中之島子ども食堂は、助成金や補助金に頼らず大

人300円の会費と活動に賛同してくださる方々からの食材等の提供だけで運営しています。

県で初めてのオープンな子ども食堂だったせいもあり、開催当初は本当に多くの方々子ども食堂に来てくれました。中には子ども食堂を始めたいという個人や団体の方も来てくださいました。個人で相談に来られる人には、子ども食堂を始めるノウハウをお伝えするのですが、団体で子ども食堂を始めようとされる人からは決まって同じ質問をされました。「お金(助成金)はいくらもらってる?」私が「何ももらっていません」と答えると必ず「それじゃあ長続きしないな」と言われました。

おかげさまで目下県内で一番長続きしている子ども食堂ですが、助成金等をいただかない理由は二つあります。

一つ目は助成金をもらうための手続きが邪魔くさく、難しいからです。助成金や支援金をいただくためには、申請書を出さなくてはなりません。そこには

1. 団体であること(うちは個人でやってる)。団体とは、役員がいて、定款があること(どちらもない。スタッフは趣旨に賛同して来てくれる人たちです)
2. 年間計画
3. 予算案等々。

多分NPOや法人には当たり前で容易なことだろうと思いますが、ただのおっちゃんには敷居が高いです。私は子ども食堂という取り組みは、それこそ地域のおっちゃんおばちゃんが近所の子どもを集めて一緒にご飯を食べるようなものだと思います。思い立ったら誰でもが始められる活動なのに、そのための助成金がおっちゃんおばちゃんには申請することが難しいものだとしたら、逆に子ども食堂を始めるときのハードルを高くしているのではないかと思います。

二つ目は、この活動はお金がほとんどかからないからです。子ども食堂を始めた当初にポケットマネーから数万円(と言っても1、2万ですが)出しただけで、あとは300円の会費といただいた食材、無償で提供していただいた場所、全員手弁当のスタッフで運営しています。

子ども食堂には、開催する箱（会場）の大きさの分だけ参加者があり、大きな会場で開催していたときは、100人を超える参加者があつたりもしました。その時も参加する大人の会費300円といただいた食材で賅っていました。

よく他の子ども食堂さんから運営費が食材購入だけで毎回数万円はかかるのに何の助成金ももらわずにどうやってるのかと聞かれます。うちとしては逆に、なぜそんなに金がかかるのかと思うのですが、うちは開催日の2日前までにいただいた食材と残っている食材でメニューを考えているので購入するものを最小限に抑えています。話を聞くと食材の提供は同じようにあるのですが、先にメニューを決めているのでいただいた食材ではなく、メニューに必要な食材を一から購入しているためにお金がかかってしまっているのだとわかりました。



これまでも中之島子ども食堂には多くの方の参加がありました。その大半は、子どもさんとそのお母さんですが、中にはひとり暮らしのおじいさんや、ご家族揃っての参加もありました。参加者の中には、もちろん貧困家庭の方がいたり、そうでない方々、日々の生活の中で孤独感や寂しさを感じる人、いろんな人が来てくれます。参加する対象に制限を設けず、ここに来てみんなで食事することが心地いいと思ってもらえたらそれでいいと思っています。

【終わりに】

何か新しくことを起こすときに、よく言われるのは「ヒト」「モノ」「カネ」をどうするかということになります。私は、「モノ」なし、「カネ」なしで子



ども食堂を始めました。幸いなことに呼びかけに応じてくれる「ヒト」はいました。

私は今も日本で一番貧しい子ども食堂の主催者だと自負しています。子ども食堂を始めてもう7年目を迎えるというのに、いまだに周囲の人から「ボランティアというのは、ある程度生活の余裕のある人がするもので、お前のように食うにも困るような者がすることじゃない」などと言われています。

しかし私が自分の「思い」を伝えることで、それを聞いてくれた人が私の「思い」を他人事ではなく自分ごとのように受け取って、手弁当で駆けつけてくれ、食材や活動場所を提供してくれています。年金が入るたびに子ども食堂にお米や調味料を持ってきてくださるおじいさん。うちの子ども食堂のために野菜を作ってくれる人。食後のデザートにとケーキを差し入れしてくれるケーキ屋さん。「さすがに肉だけはいただけないなあ」と言ったら毎回のように必要なだけ鶏肉を提供していただけることとなり、お弁当屋さんがときどきお肉を持ってきてくれるようになりました。こちらから食材をくださいと依頼したわけでもないのに、活動を聞きつけて使つてと食材とかを届けてくださるたびに「世の中ってまだまだ捨てたものではないな」と思います。

中之島子ども食堂の財布には今日も数千円しか入っていません。でも、今後も活動を継続していくことに不安はまったくありません。助成金はアテにしていますが、私は世の中をアテにしています。

和歌山と埼玉と畑

市原 諭 システム工学研究科

環境社会情報クラスタ (平成22年卒)

今、わたしは埼玉の飯能市というまちに住んでいます。関東平野の端にある、都会から近い田舎のような場所です。

大学にいる頃、那智勝浦や田辺など、農村に行く機会に恵まれ、それがきっかけで農業に関心を持ちました。卒業後は有機野菜の販売の仕事をしていましたが、いろいろな縁があり今は埼玉で有機食品の輸入の仕事をしています。

もともと和歌山や国内の農家さんがつくったものを流通させることに興味があったのですが、今は輸入品を扱う立場となり、それはそれで意義があると思うものの、自分の目指していたことと、仕事が少しずれていることを感じます。

それもそれで課題なのですが、会社として輸入業がメインであることは変わらないので、その中で今自分のできることを探しています。



和歌山のお茶や山椒を、会社の持っている販路で細々とですが扱ったりしてきました。ただ、埼玉とはいえ田舎にある会社で、そもそも自分たちが野菜も何も育てていないのはどうなのか、という気持ちが湧いてきました。

会社のまわりに畑が広がっていて、田舎としての良さがあるのに、その環境を生かせていないのが現状です。どうしていくのが良いのか答えは見つかりませんが、手始めとして会社で畑を借りて、野菜を育てています。

数人で分からないことも多く、他の仕事を優先して畑を放置してしまったりと、決してうまくいっているとは言えませんが、そこから何か次の行動を考える材料が得られたらいいなと思っています。今年は大豆を育てて、近くの納豆屋さんで納豆にして、数個であってもそれを商品としてお店で販売する

ことを目指しています。(去年は大豆を虫に食べられて、失敗しました。)

あまり大きいことは考えられないのですが、小さいことを少しずつ起こしながら、次にできることを考えていけたらいいなと思っています。

実は、単なる
飲み会

地域・大学・同窓の絆(きずな)

「和歌山ぶらくり会」を立ち上げます

和歌山大学に繋がる方なら、どなたでも参加可

2022年11月初旬 発会予定

※後日、ホームページ・メール等でご案内します

<http://kourowakayama.com/>



紀雲書評同好会

ジャンルを問いません読んだ書物を評価を交えて紹介しあいます。

会費不要・出欠自由・入退会自由

和歌山大学に繋がる方なら、どなたでも参加可 毎月第4火曜日が例会

お問併せ: iplaza_2012@yahoo.co.jp

「わたぼうしくらぶ」

経済学部30期 森下和紀



「わたぼうしくらぶ」が目指したもの

私が「わたぼうしくらぶ」という非営利の任意団体を立ち上げたのは、12年前のことです。その頃の目指したことを綴ります。

当時も耕作放棄地が増えてきている現状を直視して、耕作放棄地を再生しようという思いを持った同志との取り組みが大きな動機となりました。

耕作放棄地を週末に癒しの場に変えるプロジェクトに取り組みました。疲弊した現代社会においては、自殺者の増加、希薄な人間関係、鬱などの精神上の病、バーンアウトなどストレス社会を象徴するような状況が進んでいました。

アグリヒーリングへ

そのような厳しい現実の中、耕作放棄地を再生して、週末、自然を感じながら、家族との時間を楽しむために通う場所づくりを目指しました。北欧やデンマークでは、コロニヘーヴと言われている取り組みを参考にしました。1区画に小さな小屋と小さな庭があり、それが5つ以上集まっている集合体のことを「コロニヘーヴ」と呼びます。“もっとゆっくり自然と関わりながら日常を楽しもうよ”をコンセプトにしました。

耕作放棄地を再生して、野菜や花を育てることはアグリヒーリングという心の癒しになるということ。“心に癒しを、畑に肥やしを、そして明日の元気へ”畑で収穫した野菜を料理して、みんなでにぎやかに会話しながら、食の大切さを知り、子どもの食育にもつながります。

前述のコロニヘーヴにエコの取り組みも最大限

に活用してエコロニーファームを追求することも可能となります。生ゴミは堆肥ポットに入れて、自産自消で環境循環型となります。

家族、友人、野菜作り仲間、地域も一緒に、ファームの周りに集合してにぎやかに過ごすことがアグリヒーリングになります。

再生したファームの形態のひとつ、ケアファーム

- ①認知症予防のための農業活動を実際に体験できます。高齢者が主役で、青空デイサービスとして野菜類の栽培やハーブの栽培を中心とします。
- ②年間計画を立てて、利用者に身体的に負担化がかからないようにします。
- ③生きがい事業としてハーブの加工、野菜の加工も行います。

車椅子の高齢者の方々でも参加できるような畑に工夫します。老人福祉施設に近いところがベストですが、そうでなくてもバリアフリー的な農園にしていくことは可能です。

高槻市にある晴耕雨読舎は、高齢者でも身体的負担なく農作業が出来る工夫が随所になされていて、ひとつの理想像です。

社会とのつながりや人間関係を持つため、意欲や



生きがいを持つためというシニアライフの実現のために耕作放棄地の再生を活かします。地域でのコミュニティの深化、個人のつながりの強化につながっていくことも可能となります。

もうひとつの形態、食育ファーム。

- ①子どもたちに農業体験をしてもらい、農業の大変さや楽しさを体験してもらおう。
- ②収穫祭は、保護者、地域住民も一緒になって盛り上げていきます。
- ③キッズシェフ的なイベントも開催して、県内のシェフの協力も得て、子ども向けの料理教室も開催します。
- ④食育ファームという性格上、園児、小学生のある家庭に参加を呼びかけます。



汗をかき、付加価値の高い農業へ

農業は土作りから始まって長い年月がかかります。単年度で終わる事業でなく、地域の方々と交流しながら、話し合いを重ねながら取り組んでいくことが大切です。

各ファームは耕作放棄地を考えていますが、耕作放棄地の増加を防ぐため、現在も耕作されている畑も対象地にします。所有者さんの農業への高い知識と豊かな経験を伝授してもらい耕作を進めていきます。各種のファームが連携して、ひとつの事業として大きな相乗効果が得られるような仕組みづくりも検討していくことも重要です。

以上の事業は一朝一夕ではできなくて、試行錯誤を繰り返しながら進めていくこととなります。

まずは汗をかくフィールドを持って、農業に関心のある人たち（学生も含めて）の収穫と貨幣に換算できない付加価値（心の癒し）を付けていくことが肝要です。

「貨幣と食料」について考える、を特集しました

「道徳なき経済は罪悪であり、経済無き道徳は夢想である」二宮尊徳 [1787~1856]

(石田正昭 著「JAの歴史と私たちの役割」から)

今年2月27日の日経新聞に「過疎の市町村、全国の過半数に一専門人材充実で活力を一」の記事が掲載されました。

記事の解説文には「政府は地方創成を掲げ、自治体と共同で少子化対策に取り組むが、一部の地域を除くと人口の自然減も社会減も止まっていない」とあります。

2016年の日本の人口の居住地比率は、市部82.8%、郡部17.2%で、由々しき事態です。

思うに、過疎化は農山村漁村の主要産業である農林漁業が新規就業の場として選択されづらい現実があるからではないでしょうか。

考えれば不思議なことです。何故、命を繋ぐために必要な食料を自給する農村が過疎化して、単に交換の媒介をする紙片に過ぎない貨幣が都市に活況をもたらすのでしょうか。

それは、貨幣が集合して資本に転化することによって巨大な力を発揮するからだと思います。

資本は投資効率の最大化を求めて国境を超えた、生産—流通—消費の仕組みや、金融の仕組みを形成します。

欲望を極大化することで、需要を生み出し、生産を拡大してきた資本主義は、金融資本主義の段階になり、株主資本主義と言われるようになって来ました。格差社会などの問題を是正するため、経済に社会全体への目配りする制度変革を求める声が高まっています。

マグレビ先生は経済に道徳・倫理を取り入れるべきとお考えです。

経済原則（資本の論理）に任せていては、多くの問題が解決できないのではないかと、経済の勢いを削ぐことなく、道徳・倫理、ここでは農村＝農業＝食料問題の解決をどう図ってゆけば良いか、和歌山大学と卒業生の取組みから考えてみます。

柑芦わかやま 編集部

「新卒 田舎暮らしの挑戦と苦悩」

観光学部（11期） 畑下 森洋



1. 自己紹介

・プロフィール

はじめまして、和歌山大学観光学部11期卒の畑下と申します。18年間新宮市で生まれ育ち高校卒業まで住んだ後、大学入学をきっかけに和歌山市へ引っ越しました。大学卒業後は紀南地方の各所に拠点を置きながら、全国を転々として活動しています。

・今やっている仕事

現在は個人事業主として独立し、HPの制作やSNSの運用等のインターネットのツールを用いて、県内のビジネスをされている方の支援をさせていただいております。

・住んでいる場所

その一つの拠点として、那智勝浦町の色川地区の古民家をお借りして住んでいます。色川地区は移住者が多いということで知られている村で、現在は人口300人で、そのうちの半分は移住者の方で構成されています。

2. 半移住の経緯

・きっかけ

私がこの色川に半移住することになったきっかけは、在学中に活動を行っていた「agrico.」というサークルでの出



会でした。

・agrico

「agrico.」は県内の農家さんを訪れてボランティアをさせていただき、その中の体験や農家さんとの会話の中で色んなことを学んでいくというサークルです。



・通い

その活動先となっていた色川地区での活動に参加し、村の方々との交流を通してこの村に住む方々のことが大好きになり、生き方について学ばせていただきたいと思うようになりました。この村の方々は過去40年を通して少しずつ移住されてきた方、その新規移住者の方を受け入れてきた方々ということもあり、生き方に対する考え方や姿勢が当時の私にはとても新鮮で強烈なものでした。電気に頼らず生活している方や、Uターンをして地元でもっとも逼迫した問題の獣害対策に向き合っている方などの生き方が単純にかっこいいと思いました。

3. 現状の課題と今後について

・実現したい未来

何年後になるかは想像もつきませんが、色川の村に定住しつつ同世代の移住や田舎暮らしに興味のある人を受け入れていきたいと考えています。

現状としては、仕事の都合や自分自身の方針が定まっていない部分があり、全国を転々としているという状況になります。焦らずに、自分が本当に長く続けられること、ストレス無く人に価値を提供し続けられることは何かと常に模索しています。

これからからも行動を止めず、学び続けていきたいと思います。

和歌山大学新聞の方にもインタビュー記事が掲載されておりますので、そちらもぜひ見ていただくと幸いです。

https://note.com/wu_press/n/n02f9c54964b8

クラブ紹介

準硬式野球部

平素より和歌山大学準硬式野球部への多大なるご支援、ご声援を頂き誠にありがとうございます。私たちは、春と秋に行われるリーグ戦に向けて、日々練習しています。

昨年度は新型コロナウイルスの影響を受け、試合数の減少や活動の制限があり、なかなか思うように活動することができませんでした。今年度もコロナウイルス感染症の影響や制限ありましたが、新入部員が12名新たに加わり、自分たちで何ができるかを日々考えて楽しく活動しております。

今年度は春リーグでは4試合、秋リーグでは10試合に出場し、4位という結果で無事シーズンを終えることができました。

次年度はさらにリーグ戦で勝利を重ねられるよう日々邁進してまいります。部員全員で、皆様への感謝を力に換えて頑張っていきますのでご声援よろしく願いいたします。

今後とも和歌山大学準硬式野球部のさらなる発展・活躍のため、変わらぬご支援・ご鞭撻のほど宜しく願い申し上げます。



ヨット部

和歌山大学体育会ヨット部は、1949年に創部され、70年以上続く歴史のある団体です。2020年度には全国大会出場を果たし、全国大会出場常連校となれるよう日々練習に励んでいます。

ヨット競技は、風を利用した海を舞台としたスポーツであるため、天候によって練習環境が大きく左右されます。ヨットに乗る技術に加え、自然を理解する力も必要となります。これがヨット競技の魅力であり、醍醐味です。

今年も新型コロナウイルスの影響で、制限下での活動ではありましたが、新入生が11名入部し、部員数は現在24人となりました。

私たちは平日に活動が出来ないため、主な活動日は土日祝、長期休暇と限られています。そのため、この限られた時間の中で、どう練習し時間を使うかを自ら考えながら、目標達成のためにチーム一丸となって活動しています。そんな中ではありますが今年も470級においては村瀬・植田ペアが全日本大会へ出場、関西学生ヨット選手権大会では総合5位の成績を残すことができました。

来年度はより高みを目指し、目標である全国大会出場へ向けて一步一步頑張りたいと思います。



前稿は、紀南地域での新たなスマート社会への動きをご紹介しましたので、今回は紀南地域の伝統産業をレポートします。

紀南地域には、400年前から続く「紀州南高梅」「紀州備長炭」の産地があります。

日本での梅の生産は、約1300年前頃からされており、梅干しは常温保存が可能で、食中毒予防、疲労回復効果があり、副菜や薬として昔から重宝されてきました。

日本での炭の生産は、なお古く新石器時代の約30万年前からとされています。「白炭」と言われる備長炭は、1200年前に熊野地方で焼かれていた熊野炭（ゆうやたん）が起源で、元禄時代に当時の製炭士と備中屋長左衛門により改良販売されて、製炭技術が確立したと伝えられます。

それ以後も長らく日本人の暮らしを温め続けてきました。その後の高度経済成長期に、燃料革命が起こり、家庭に電気やガスが普及して、家電も開発される中で暮らしはとて便利になり、炭の需要も大きく減少して現在に至ります。

私が小さい頃、「炭」はまだ日常の暮らしにありました。祖母の家に泊まりに行くと「豆炭あんか」と呼ばれる暖房器具を利用して、寒い夜に足元に入れて眠ると布団が温かくて、とても良く眠れました。庭先で、祖母が豆炭に火をつけて火箸で専用あんかに入れて布袋で覆う作業を見るのが好きでした。今は昔話です。

「豆炭あんか」も家庭では、生活用品として見かけなくなり、博物館に展示されるようになりました。近年でのキャンプブームや防災用品では「豆炭あんか」も見直されていて、五千円程度から流通もしています。形を変えながらも、現代にも「梅」と「炭」は、日本人になくはならないもので、紀南地域はその需要を支えています。

政府の統計データを見ると、全国の梅の出荷量は93,200t、その半分以上65,200t（2021年）は、当地みなべ田辺地域で生産されていて、全国1位です。

また、白炭の全国の年間生産量は29,483tで、その内1044,7t（2020年）が和歌山県産で全国2位です。品質も最高級として流通しています。

この梅干しと備長炭は、紀南の急峻な斜面と海岸線沿いの痩せた大地でも生育可能な梅と、雑木林の樹木を加工することで生み出されています。



択伐する製炭士の原さん

里山には、炭を焼く「炭焼きさん」と呼ばれる製炭士が居られて、山が管理されて、森が守られてきました。他の地域のような皆伐ではなく「択伐」という管理方法によって、繰り返し木を育成させて効率よく伐り出すことで「薪炭林」が継承されていて現在もその恩恵で里山の生き物の多様性が維持されているのです。



収穫期の「紀州南高梅」

また梅の木も、一枝に沢山の実をつけますが、自分の花粉では実をつけることができないため、梅畑には数種類の梅の木が植えられ、この薪炭林に暮らしているニホンミツバチや小鳥が梅の受粉の手助けをしています。梅栽培の「農業」、それを結実するための養蜂の「畜産業」、その生き物が暮らす森を守る炭焼きによる里山保全の「林業」、この3つの産業が人々の暮らしの中で素晴らしいコンビネーションを織り成して、循環するシステムが機能しており、紀南地域での400年以上も続く「持続可能な産業」として、現代にも継承されています。限られた資源を効率的に利用した先人達の生産活動が、今も豊かな暮らしと雇用を生み出しています。

当地の梅を中心にした産業のモデルは、平成27年イタリアのローマで「世界農業遺産」に認定されています。この認定には、和歌山大学システム工学部の教員方も尽力されました。その教員方と次世代の人材育成のために、南紀熊野サテライトでは今春2月初旬まで「世界農業遺産」の寄附講義を4年間に渡り、開講させて頂きました。講義では、梅の栽培や蜜蜂の生態、製炭や森林に関して学び、修了すると梅システムマイスターとして認定されます。



南紀熊野サテライトで

「世界農業遺産」を学ぶ大学生と社会人

受講者は、議員や教諭、自治体職員、農業従事者、デザイナー、地域ガイド、高校生、大学生など様々な方が学ばれて、4年間で43名の梅システムマイスター認定者が育成されました。

認定取得者は、本学生の宿泊実習の受入や農家での実習指導、職人方への調査、授業にも登壇いただき、現在も里山での植林活動、小中高大連携などの教育支援に取り組むパートナーとしても、和歌山大学と一緒に後進の育成に励まれています。

近年、現地で学習したクリエの学生も「和大学生に、もっと地域の持つ資源の素晴らしさを伝えたい。」と生協のご担当者様や、経済学部阿部先生のご協力を受けて、学生食堂の配膳トレイにランチペーパーとして梅システムを紹介した紙を置かせてもらう取り組みを始めています。生協の方のご意見交換では、食堂という利点を活用して、産地直送の美味しい梅や紀州備長炭の炭火で焼いたメニューなどの開発を一緒に出来れば楽しいと話しています。

梅干しと言えば日の丸弁当。戦中や災害時にも活躍しており、お腹を壊しても白湯に崩して薬の代わりにも飲まれます。ウィズコロナの時代に免疫力を高める食材としても注目です。クエン酸の疲労回復効果も運動時、夏場にも積極的に取りたいです。

今一度見直したい素晴らしい食材なのですが、食生活の変化で梅干し離れも進み、消費は低迷しています。梅干し加工事業者も負けずに時代に合わせた商品を提案されています。おやつにも食べてもらえるように、ハチミツ梅や昆布風味の金箔を纏った調味梅などは高級進物にもなっています。

見目麗しく口当たりも良いのですが、保存が効かないなど昔ながらの梅干しには勝てない部分もあり、地元の梅干し通が言うには、長らく地元で愛されている一番高級な梅干は、素朴ながらご飯や料理、酒にも合う、お天道さまの下でベテラン農家によって手塩にかけて良い塩梅（あんばい）に育てられた「塩梅」（しおうめ）なのだそうです。大学もそうありたいものです。



現地で「梅システム」を学ぶクリエのチーム

また、紀州備長炭は、無形民俗文化財に指定されています。普通の炭は「黒炭」と呼ばれ、紀州備長炭は「白炭」と呼ばれます。白炭は、黒炭になる炭化までの工程から、更に一手間をかけて 1000 度まで窯の温度をあげて、更に不純物を焼き、炭素の純度をあげる精練の後、灰をかけて消火します。この最後にかける灰で表面が白くなるために白炭と呼ばれます。

出来上がりは 95%以上の固形炭素の塊で、鉄よりも硬く、白炭同士を打ち付けてみるとキーンと澄んだ金属音がします。割口も工芸品のように輝く美しい炭が出来上がります。



紀州備長炭と焼きもの

この白炭が素晴らしいのは、実際に食材を焼いた時に実感します。バーベキューで普通に使う黒炭は、高温で食材表面は焼けますが、中まで焼けず煙臭く

なりますが、白炭は煙も殆ど出ず、遠赤外線の高温で中身までふんわり焼けます。火付けは悪いのですが、燃烧し始めると火持ちもよく、高級うなぎ屋、焼き鳥屋で白炭が重用されている理由が良くわかります。

少し値段はかかりますが、野外でも美味しい料理が食べたい私は白炭派です。恋と同じで簡単に火が付かないのを付けるのも一興です。

和歌山県の令和2年度の炭生産量は、1047.5tで、内訳は、黒炭は僅か2.8tで白炭が1044.7tで生産の殆どが紀州備長炭です。材料はウバメガシ、カシ、ナラなどです。

当地の製炭士が択伐で山を守る仕事は、持続可能な産業を学ぶ教材にも有効です。しかし、この無形民俗文化財に指定されている炭焼きも、地元でも正しく知る人は少なく、従事者も高齢化が進み、後世への継承も課題が多くなってきています。

地域の伝統の継承は「関心を寄せてもらい、正しく知ることから」と感じています。



製炭士の原さんに話を聞く大学生

現在、南紀熊野サテライトで学んだ地域の皆さんや学生、教員方と副教材の開発や、地元産業を体験する教育機会の充実にも取り組んでいます。

地域の伝統産業を次世代に繋ぐ一助になればと、副教材として動画視聴QRコードをつけた製炭の学習下敷きも制作しています。地元小学生に配布してアンケートを取り、体験型プログラムも実施します。子供達だけではなく保護者の若い世代や学校関係者にも伝統産業に関心を寄せてもらう目的です。

その取材で、お世話になっている製炭士の原正

昭さんにお会いした際に、炭焼きの動画を撮ってもらったとお聞きして視聴してみました。山と共に生きる製炭士の息づかいが伝わる作品で、音も映像も大変素晴らしかったです。このドキュメンタリーを制作された内山さんに、地元の子供達にも見てもらいたいと学習教材に映像を付けるご相談をしました。

併せて同窓会の皆様にもQRコードから視聴できるものをご用意いただけましたので、紹介文と共に掲載します。ぜひご視聴頂けますと幸いです。なお、映像はQRコードを知っている方のみ視聴可能で、映像や音楽は、全てRITORNELLO FILMSの著作物なので、第三者に無断転載されないようにお願いします。



製炭士の原正昭氏と紀州備長炭

紀州備長炭のドキュメンタリー映像



製炭士の原さん親子のドキュメンタリーです。山を生かす択伐の技術、煙の匂いや色だけで判断し、極限まで精錬する炭焼き。人と森が一体となったものづくりを、ぜひご体験ください。

RITORNELLO FILMS

上記のQRコード読み取りで映像が視聴できます

昨年度に「うめぼしのできるまで」の学習下敷きとアンケート配布しており、「親子の会話が増えた」「梅に関心を持った」「作業を体験してみたい」という肯定的なご意見を多くいただきました。

地道な地元教育ですが、地消地産に向けて価値ある消費の喚起にもなればと目論んでいます。

食も伝統も、生産して継承する「ひと」が無ければ途絶えてしまいます。里山の自然に感謝しながら継承する取り組みにも寄り添っています。

これからも大学の教育研究の成果を地域還元し、持続可能な地域振興や、時代の課題に即した学びの機会を設けながら、紀南地域の「知」の拠り所として同窓の皆様と共に活動を進めていきます。

何事もいい塩梅。すみに置けない地元の伝統産業のご紹介でした。



修了生と学習教材の制作をする製炭士の方々



令和3年度発行の学習下敷き「うめぼしのできるまで」

和歌山県 旧田辺地域の 農産物直売所と都市農村交流

農林水産省の2011年発表の調査によれば、2009年度現在全国で直売所が16,816施設あり、コンビニエンスストアの最大手「セブン-イレブン」の2013年2月時点の国内店舗数15,072店を上回る。また、農産物の全流通量の5%が直売所ルートといわれている。 出典：フリー百科事典『ウィキペディア』

和歌山県田辺市の農産物直売所

県下第二の都市田辺市には、その都市部（旧田辺市）に販売額10億円を超える常設型の直売所が3カ所開設されている。

「地域づくり型」……「きてら」 1999年開設
「民間企業参入型」…「よってって」 2002年
「農協直営型」……「紀菜柑」 2007年

こうした常設型店舗において複数の生産者に関わる直売活動は、我が国独自のもので他国には見られない特徴である。（農業市場研究第23巻1号）

田辺市上秋津 農業法人株式会社『きてら』



直売所開設20年を超える小さな直売所ですが、一年中柑橘・オレンジが店頭に並ぶ直売所として、全国的にも有名で多くのお客様で賑わっています。

同社HPから

「秋津野ガルテン」

平成20年11月1日 田辺市上秋津地域に元上秋津小学校をリノベーションしオープンした施設。

宿泊・農家レストラン・農業体験・地域づくり学習・スイーツ作り体験・テレワーク室など様々な体験やサービスが提供されています。

J A紀南ファーマーズマーケット紀菜柑



ファーマーズマーケット紀菜柑（きさいかん）はJA紀南の基幹となる大型直売所。田辺から串本まで、とれたての新鮮な野菜、果物、花、梅干しや各種加工品はじめ、備長炭製品まで、さまざまな商品を取り揃えています。季節ごとのイベントや体験教室も随時開催し、消費者に農業や食に関わる情報を発信しています。

J A紀南HPから

(株) プラス「よってって」イオンモール和歌山店



株式会社プラスは、昭和23年の創業以来、流通業を軸に、不動産の賃貸や管理、スポーツクラブの経営等、半世紀以上にわたり地域に根ざした事業を展開、平成14年からは民間企業による大型農産物直売所の多店舗化という新しいビジネスモデルにチャレンジし、現在、和歌山県下に13店舗、大阪府下に9店舗、奈良県下に5店舗を展開し、大型ショッピングモールへの出店に加え、道の駅施設内にも出店しております。

同社HP社長挨拶から

これからの農村は、農業で食料を生産する所から、様々なイノベーションで、社会にインパクトのある革新や刷新、変革をもたらす拠点になって行くことが予想されます。

柑芦和歌山 編集部

農ある暮らし

担い手の減少、耕作放棄地の増加（和歌山県統計年鑑）

	農家数の推移	田畑耕作面積	耕作放棄地面積
平成27年(2015年)	29,713 戸	33,700 ha	4,661 ha
令和2年(2020年)	25,263 戸	31,800 ha	※

※2020年調査以降、耕作放棄地面積調査は廃止。

新規就農者数（和歌山県政ニュース令和3年6月17日）

令和2年度の新規就農者は160名で、昨年度より27名増加した。そのうち、新規学卒者が10名(構成割合6%)、Uターン就農者が53名(33%)、新規参入者が49名(31%)、農業法人等への就農者が48名(30%)であった。部門別では、果樹が106名(66%)で全体の過半を占めた。また、世代別では、青年(39歳以下)は107名、中高年齢者(40歳以上65歳未満)は53名であった。

農家になる3つの方法

- ①農業法人等に就職する：働きながらスキルを身につけ、将来的に独立することもできる。
- ②実家等の農業を継ぐ、既存農家を経営継承する、初期投資額を抑えられる。
- ③自分で起業する：技術の習得や資金の準備、農地や設備の確保等に初期投資が必要。
農地取得後の農地面積の合計が、原則50アール※以上であることが必要。
※この面積は、地域の実情に応じて、農業委員会が引き下げることが可能です。

「農業」と「農」は違うもの

「農業に興味あるんです」と、いう同世代によく会う。というか、僕がそうだった。けれど、それは正確な表現じゃないと気づいた。僕は「農」に興味がある。「農業」には、そこまで興味がない。

「農業」と「農」、その違いはなにか。辞書の定義なんかは置いておいて、僕のイメージで話します。

「農業」と「農」の違いとは……

「農業」とは、産業だ。産業とは、余剰生産を生み出し、商品・サービスの交換をする活動であり、その根本には、売買と利益があるイメージだ。

一方で「農」とは、もっと漠然とした意味合い。それは、暮らしであり、心構えであり、生き方だ。土のなかで生きている人、生き物と向き合って生きている人、自然といっしょに生きている人。そんな人を見て、僕は「農」的だと感じる。

「農業」は、仕事っぽく、行動的で、実際にある感覚。「農」は、精神的で、目には見えない感覚。

「農業的な暮らし」とは言わないが、「農的な暮らし」とは言うのは、そんな感覚からなのかな。

以上 つばさの軌跡：<https://tsubasakato.hatenablog.com/> から

京大卒。新卒の2018年春、鳥取県智頭町に移住し、社員2名の林業会社に就職。林業家を志す。

趣味や、副業で、暮らしの中に「農」を取り入れたいと思う人は多い。産業としての「農業」を守り育てることは大切だが、「農家」になるには超えるべき障壁がある、「農」に親しむことはかなり簡単にできる。

柑芦和歌山 編集部

故 南村桂太郎 元支部長を悼む

坂本 漸

二十一年十一月二十六日

元支部長 南村桂太郎氏 (元柑芦会和歌山支部長・工専一回卒業 尾高ゴム工業(株)元代表取締役が逝去されました。



いつも笑みを湛え、みんなを包み込むような表情で、支部総会等には同級生二・三人を伴って参加されるのが常だった。日常的にも同級生との友情を保たれていたのでしょう。

かつて支部幹事長として、また支部長として、楽しい柑芦会を目標に活動の活性化に取り組み、支部総会を紀北、紀中、紀南等で開催するという方法で地方に住まわれている会員の皆さんにも気軽に参加していただくという趣旨でした。橋本市、紀の川市、有田市、田辺市へと、当地の名所旧跡等を訪ねながら、楽しい総会の日でした。

ある時、役員会の終了後、私の近所の方の名を上げて、その方に案内してください。相手の方と私は住居も、事業所も隣でありよく存じていたので、すぐに案内しました。急なことで相手も驚いていましたが、運よく会えることができました。

聞くところによると、昔の機械関係の仲間で、当時よく付き合いもあったようでしたが今はすっかり疎遠になっていたらしい。

今は関係のない方にもちよつと訪ねてみるという気さくな南村さんでした。

そんな先輩でしたから、地域でも自治会長を努められていたようでした。工専一級下の二回卒業生の小畑高雄氏がユネスコ和歌山で活動されていましたが、南村さんの奥様もユネスコに入会され、活躍されていたとき、内助の功として南村さんも随分応援されていたようでした。

人が好き、人との付き合いが好き、いろんなことに興味を持たれ、好奇心旺盛な

先輩・南村さんでした。

小池布紗雄君の急な逝去を電話でお伝えしたところ、今、施設で過ごしつておられるとのことでしたが大変お元気そうで、早すぎる小池氏の訃報を大変残念がつておられました。

先輩 南村桂太郎 元和歌山支部長の逝去を悼み 合掌

年会費お支払いのお願い

和歌山支部は支部会員の年会費により運営維持されています。年会費は3,000円で主に支部事務局の運営、柑芦わかやまの発刊に使われます。また本会の機関誌「柑芦」は原則として会費納入者に送付させていただいております。

お支払いは、同封の振込用紙(郵便局用と紀陽銀行用)のいずれかをお使いください。

なお、ネット等の振込に関しては、下記支部の銀行口座にお願いいたします。その際にはお名前の前に卒業期等を入れてください(例:ケイ42コウロタロウ)。

紀陽銀行 本店営業部 普通預金 789216

支部ホームページを開設しました kourowakayama.com で検索

昨年より遅ればせながら支部のホームページを開設いたしました。一度検索してご覧ください。

まだまだ未完ながら今後は、支部機関誌の発行や総会のお知らせ等についてはHPにて広報する予定ですので、よろしくお願ひいたします。なお、各支部会員への連絡は今後E-mailにて行いたいと思っておりますので、支部のメールアドレス宛に皆様方のメールアドレスをお知らせいただきたくよろしくお願ひいたします。その際にはお名前とともに卒業期等の記載(例:経済学部42期柑芦太郎)をお願ひ致します。kourowakayama@gmail.com

令和3年度会計報告

柑芦会和歌山支部

1. 一般会計の部

【収支計算書】

自 令和3年4月1日 至 令和4年3月31日

単位:円

収入の部				支出の部			
科目	予算額	実行額	摘要	科目	予算額	実行額	摘要
前年度繰越額	1,664,511	1,664,511		総会費	350,000	45,353	ルミエール華月殿
会員年会費	450,000	489,000	3000円×163名	支部ニュース発行費	450,000	523,294	「柑芦わかやま」43・44号
総会会費	120,000	0		通信費	650,000	774,411	会員宛文書・柑芦わかやま送料等
柑芦会運営補助金	380,000	380,000	通信費助成金等	印刷費	50,000	111,100	案内状・封筒等印刷
預金利息	10	5	紀陽銀行普通	事務所費	120,000	120,000	支部事務所借室
雑収入	50,000	10,000	総会祝金	会議費	50,000	0	
				慶弔費	80,000	3,020	他支部祝金、会員慶弔等
				雑費	50,000	31,852	振込手数料、出張旅費等
				支出合計	1,800,000	1,609,030	
				次年度繰越金	864,521	934,486	
合計	2,664,521	2,543,516		合計	2,664,521	2,543,516	

【貸借対照表】

科目	令和3年3月31日	令和4年3月31日	摘要	科目	令和3年3月31日	令和4年3月31日	摘要
普通預金	170,441	681,426	紀陽銀行本店	正味財産	1,664,511	934,486	
当座預金	1,494,070	253,060	ゆうちょ銀行				
合計	1,664,511	934,486		合計	1,664,511	934,486	

2. 基金の部

【収支計算書】

自 令和3年4月1日 至 令和4年3月31日

単位:円

収入の部				支出の部			
科目	予算額	実行額	摘要	科目	予算額	実行額	摘要
前年度繰越額	899,524	899,524		就活・交流支援金	100,000	100,000	留学生/硬式野球部支援
雑収入	100	8	普通預金利息	次年度繰越金	799,624	799,532	(各5万円)
合計	899,624	899,532		合計	899,624	899,532	

【貸借対照表】

科目	令和3年3月31日	令和4年3月31日	摘要	科目	令和3年3月31日	令和4年3月31日	摘要
普通預金	899,524	799,532	紀陽銀行本店	正味財産	899,524	799,532	
合計	899,524	799,532		合計	899,524	799,532	

令和4年度収支予算書(案)

柑芦会和歌山支部

1. 一般会計の部

【収支計算書】

自 令和4年4月1日 至 令和5年3月31日

単位:円

収入の部				支出の部			
科目	予算額	昨年実行額	摘要	科目	予算額	昨年実行額	摘要
前年度繰越額	934,486	1,664,511		総会費	500,000	45,353	ダイワロイネット和歌山
会員年会費	480,000	489,000	3000円×160名	支部ニュース発行費	250,000	523,294	「柑芦わかやま」45号
総会会費	280,000	0	7000円×40名	通信費	300,000	774,411	文書送付料外
柑芦会運営補助金	380,000	380,000	通信費助成金等	印刷費	50,000	111,100	文書外印刷費
預金利息	4	5	紀陽銀行普通	事務所費	120,000	120,000	支部事務所借室
雑収入	50,000	10,000	総会祝金等	会議費	50,000	0	幹部役員会等
				慶弔費	80,000	3,020	会員・大学慶弔支部祝金等
				雑費	50,000	31,852	振込手数料、出張旅費等
				支出合計	1,400,000	1,609,030	
				次年度繰越金	724,490	934,486	
合計	2,124,490	2,543,516		合計	2,124,490	2,543,516	

2. 基金の部

【収支計算書】

自 令和4年4月1日 至 令和5年3月31日

単位:円

収入の部				支出の部			
科目	予算額	昨年実行額	摘要	科目	予算額	昨年実行額	摘要
前年度繰越額	799,532	899,524	紀陽銀行・普通	就活・交流支援金	100,000	100,000	留学生活動交流等支援
雑収入	5	8	普通預金利息	次年度繰越金	699,537	799,532	
合計	799,537	899,532		合計	799,537	899,532	

留学生寄稿 「コロナ禍での留学生活」

和歌山大学大学院経済研究科 庄秀（ショウシュウ）さん

皆様、こんにちは。和歌山大学大学院経済研究科の庄秀（ショウ シュウ）と申します。

私は中国遼寧省大連市出身であり、大学卒業後2017年12月来日しました。日本語学校で日本語を勉強し、2019年4月経済研究科の研究生として和歌山大学に入学し、一年後の2020年大学院に進学しました。

大学院進学前に新型コロナウイルス感染症が流行り始まってもう2年間です。この2年間はちょうど大学院の2年間でした。コロナの影響で留学生活は一変しました。

まず、従来の対面方式の授業からオンライン授業またオンデマンドになりました。パワーポイントを見るオンラインでの授業は密度が濃いものが多く、日本語能力不足で理解できなかった点は多かったです。

パワーポイントを何回も見返す必要があったり、課題も多かったりと、負担が大きかったです。

大学にも行けなくなり、大学図書館が使えないため資料を探すには大変でした。幸い和歌山大学図書館から欲しい本をご郵送頂き、大変助かりました。

そして、修士論文の作成、報告はすべてオンラインで行われ、先生にも出会えなかったが、丁寧にご指導いただき、修士論文を完成し、卒業ができました。

生活が制約される中、日本に就職するため自分の価値を高めたいと考えました。学校に行けないので、自学で日本語能力試験 N1 と簿記の資格を取得しました。昨年から就職活動をやっていましたが、なかなかいい結果が得られなく、今まだ就職先が決まっていません。

その中、私はITスクールの授業を試してプログラミングに興味がありました。現在オンラインでIT授業に通ってプログラミングを習得し、IT会社を志望し、就職活動をしています。

コロナ禍の影響で、アルバイト先の出勤日数もかなり少なくなりました。両親からの仕送りが難しく、生

活に困っていましたが、幸いにロータリー米山奨学金に採用していただき、なんとか留学生活をやってきました。

更に、毎日在宅なので日本語会話能力は伸びなかったが、WIN コンコードのご支援で活動に参加して日本文化を体験し、日本語で話して、日本の社会についても理解するようになってきました。

コロナ禍で思わなかった留学生活を送ることになりましたが、大学先生、日本人の方のご指導のご支援のおかげで順調に卒業し自立で留学することができ、皆様に大変感謝します。



今後どのような社会状況になるか読めない中で、日本の社会への理解も深める必要がありますが、2年間の留学生活で養った順応力を発揮して日本で一人前の社会人になるよう努力します。

編集後記

「貨幣と食料について考える」を特集しました。

令和2年（2020年）、全世界に新型コロナウイルス感染症が蔓延し、変異ウイルスによる第6波の収束が見通せない中で、令和4年（2022年）2月24日、ロシアのウクライナ侵攻が始まりました。

食料、医療、エネルギー、交通などを守ることの重要性が、再認識されています。

今号も和歌山大学の先生方や同窓生など、多くの皆様のご協力を頂きました。お礼申し上げます。

「柑芦わかやま」編集委員
松野浩行、山中盛義、西川一弘
(事務局) 渥美正道、渥美盛也
goodwillparty@gmail.com